

<報告>

基礎ゼミ2022 お話① シュトックハウゼンを知っていますか？

What do you know about Stockhausen?

近藤 伸子

KONDO Nobuko

本稿は2022年4月5日、本学講堂大ホールにて、基礎ゼミお話①「シュトックハウゼンを知っていますか？」と題して行ったレクチャーの報告である。あまり触れる機会のない「現代音楽」の魅力を伝えると同時に、シュトックハウゼンのクリエイティブで固定観念を打ち破る作品や生涯から、今後の学生生活へのヒントを汲み取って欲しいと願い、このテーマを選んだ。

キーワード：基礎ゼミ、シュトックハウゼン、現代音楽、電子音楽、ピアノ曲

◆はじめに

国立音楽大学では、毎年新入生および新3年生を対象に、「基礎ゼミ」として教員を中心とするコンサート、お話など様々な催しとクラス授業、施設見学などを実施している。ここ数年は、コロナ禍のため、オンライン併用による開催となっていたが、今年ようやく全面的に対面の形で行うことができた。本稿は2022年4月5日、本学講堂大ホールにて、基礎ゼミのお話①「シュトックハウゼンを知っていますか？」と題して行ったレクチャーの報告である。

◆レクチャーのねらいと目的

20世紀を代表する作曲家のひとりであるカールハインツ・シュトックハウゼンは、音楽史的にみても非常に重要な人物でもあり、また後世に残るであろう数々の傑作を書いている。

しかし、生前、華々しく作曲界をリードし、その発言が注目され、影響力をもつかに見えた彼の作品は、死後15年ほど経つ現在、次第に忘れ去られつつあるように思われる。

また、シュトックハウゼンのみならず、ブーレーズ、ベリオ、クセナキス、ケージ、リゲティ、武満徹ら20世紀現代音楽シーンを牽引してきた巨匠達が鬼籍に入った今、現代音楽自体に関心を寄せる人がさらに



カールハインツ・シュトックハウゼン
(1928-2007)
[www.karlheinz-stockhausen.org]

減少しつつあるのではないだろうか。歴史的淘汰を経っていない現代音楽は、古典の作品と比べて玉石混淆で、面白くない作品に接する機会も多いとはいえ、目を凝らしてみれば素晴らしい作品も沢山ある。音大生も、作曲科の学生を除けば、現代音楽に対する知識は少なく、自主的に取り組もうとする学生は非常にまれである。今回のレクチャーで、生演奏を含めて数多くの作品に直に接することで、学生の現代音楽への関心が生まれ、また音楽という概念についても再考する機会となれば、と考え、このテーマを選んだ。サブテ

マとしては、「固定観念を打ち破ろう」とのメッセージを込めたつもりである。

基礎ゼミの性格上、「単なるシュトックハウゼンのレクチャーにならないように!」とのリクエストがあったため、私自身がなぜ現代音楽に興味を持ったか、また実際の演奏に際してどのような困難に遭遇したか、など体験談を挟みつつ、生演奏や音源、動画の視聴など交えて話を進めた。シュトックハウゼンの音楽を流す時間をできる限り多く取る、という点に配慮して全体の構成を考えた。

◆準備段階での様々な困難

演奏曲目が、内部奏法を含み、サウンドプロジェクトを行う共演者を必用とし、会場を取り囲むようにスピーカーを配置しなければならない作品であったため、実現への道のりは容易ではなく、共演者の確保や機材の運搬の面から、一時は暗礁に乗り上げて、テーマの変更も脳裏をよぎったが、幸い様々な方々のご協力で実現することができた。

◆レクチャーの概要

- 1: 自己紹介
- 2: なぜ現代音楽に興味を持ったか
- 3: なぜシュトックハウゼンをテーマに選んだか
- 4: シュトックハウゼンの生涯
- 5: シュトックハウゼンの作品
- 6: シュトックハウゼンの評価
- 7: 現代曲の演奏上の問題点

以下、各項目で話した内容をまとめる。

1. 自己紹介

音楽との関わりを中心に、簡単な自己紹介を行った。

2. なぜ現代音楽に興味を持ったか?

・調律師／プロデューサー 原田力男氏との出会い

中学性の頃から調律を依頼していた故・原田力男氏は、私財を投じて現代音楽のコンサートをプロデュースするユニークな人物で、その影響で武満徹、高橋悠治、ケージ、クセナキスなどのコンサートに通い、彼らの刺激的な著作にも接するようになった。

・なぜ西洋の音楽を日本人がやるのか?

テクニック的に勉強になるショパンやリストの曲を集中的にうんざりするほど練習したこともあって、そ

れらの曲に辟易し、「なぜ言語も生活習慣も時代も違う西洋の音楽を日本でやるのか?」「外国人が邦楽を極めようとするようなもので、結局西洋人の演奏にはかなわないのではないか?」などの疑問が生じた。

・すべての曲がIの和音で終わる必要があるのか?

殆どの曲がIの和音で始まり、Iで終わること、多くの曲が規則的な拍子を持ち4小節周期であることなど、調性音楽の規則の数々に窮屈さを感じるようになり、ストラヴィンスキーの《春の祭典》や、シェーンベルクの《期待》など無調の音楽に自由さと魅力を感じ始めた。

・きれいで心地よいものだけが芸術なのか?

古典派、ロマン派時代には、心地よさを破壊するような音楽は成立し得なかったが、音楽大学で学ぶレパートリーの多くはこの時代の作品である。それが次第に「きれいな事」、現実味を持たない「絵空事」に思え、自分の時代の音楽ではない、という違和感が生じた。近現代では、芸術を享受する階層の歴史的な変化に伴い、「美」の概念が単に美しく心地よいものを超えて変質してきている。それらへの共感が増していった。

・ハンディキャップ

留学中に様々な名教授のレッスンを受け、国際コンクールで体格の良い西洋人の男性の名演に数多く接するうちに、ロマン派までの作品のピアノ演奏におけるハンディキャップを痛感するようになった。生まれ育った国の音楽の表現を現地の人は生来的に身につけているのに対し、こちらは常に「学習」し続けなければならない。またピアノという楽器が西洋人の男性の体格にもっとも適した構造を持っており、小柄な日本人の女性には不向きなのではないかという疑問も感じた。その点、ある意味抽象的で、民族性を超越している現代音楽に関しては、国民性のギャップが生じにくいのではないかと、そこに活路が見いだせるのでは?という期待を抱いた。

・誰もやっていない領域の魅力

古典の傑作は、すでに多くのピアニストが手がけ、理想的な名録音も数多く残され、それを超える演奏を目指すのは不可能に近い。むしろ演奏する人の少ない現代音楽の分野にこそ可能性があるのではないかと考えた。

・他の芸術領域との関連性への興味

音楽以外の美術や文学、映像の世界に目を向けても、ジョイス、ベケット、ゴッホ、カンディンスキー、ピカソ、ベーコン、ロスコなど、近現代は抽象的なもの、単に美しく心地よいものを超えた、破壊的な、或いは醜悪なものを包含する多様な美の概念が成立してきている。そうした音楽と他の芸術領域との関連性、共通性にも興味を引かれた。

3. シュトックハウゼンをなぜテーマに選んだか？

・作品の魅力

現代の作曲家には、その発想や著作は興味深い、実際に作品を聴くと、コンセプト倒れて面白くない、という例が少なくない。作品を解説する言葉が作品自体を凌駕している、というケースも多い。その中にあって、シュトックハウゼンは紛れもない傑作を多数残している。《少年の歌》《グルッペン》《ピアノ曲X》《コンタクト（ピアノと打楽器入りのバージョン）》など、もっと聴いてみたい、或いは演奏してみたいと思わせる引力を持っている。

・クリエイティブな人生、柔軟な発想、高度なセルフプロデュース力

シュトックハウゼンの人生は波瀾万丈であり、自分の音楽のために演奏家の集団を結成し、出版社を設立、自作の演奏のための講習会の開催、2度の結婚と2人のパートナーとの共同生活、家や墓や楽譜やCDを自らデザインするなど、様々な面で非常に興味深い。

・職人気質、強靱な意志と持続力

その発言の荒唐無稽さだけが強調されて、破天荒な人物と思われがちだが、実は強靱な意志と持続力を備えた、職人気質の作曲家という側面も併せ持っている。セリ一的な作曲法への終生のこだわりや、長大なオペラツィクルス《光》の完成、出版社の設立や講習会の開催など、周到な計画性と実行力、持続力無くしては実現し得ない事であろう。

・全てを音楽に反映

旅先で触れた各国の音楽、恋人との別離による精神的動揺、夢で見た情景、子供の言葉など、あらゆるものを自らの音楽に貪欲に取り込む姿勢がうかがえる。

4. シュトックハウゼンの生涯

1928年8月22日ドイツのケルン近郊で生まれる。

父ジーモンは教師、母ゲルトルトは後に精神を病み、療養所に入所。

1935年 アルテンベルクに転居。カトリック信仰を深める。

父ジーモンは教員であったためナチスに入党。

1941年 母がナチスの優生保護法の犠牲となり死去。

1944年 野戦病院で働く。

1945年 父が戦死。

1946年 ケルン音大音楽教育コースに合格。

1951年 ダルムシュタット夏期音楽講習会に参加。メシアンの《音価と強度のモード》に衝撃を受ける。ドリスと結婚、4人の子供。マルクス：トランペッター、マイエラ：ピアニスト。いずれもオペラ《光》に出演。1952年 パリ音楽院で、メシアンの楽曲分析クラスを聴講。ブーレーズと出会う。

1953年 ケルン電子音楽スタジオで、2年間アイメルトの助手を務める。

1954年 ボンのマイヤー＝エブラーのもとで、音声学、コミュニケーション理論、アレアトリ、偶然性などを学ぶ。

1963年 カトリックの信仰を放棄。

1964年 シュトックハウゼングループ（コンタルスキー兄弟他）を結成。

1967年 美術家、アーティストのメアリー・パウアーマイスターと結婚、2人の子供。ジーモン：シンセサイザー奏者、オペラ《光》に出演。

1970年 大阪万博で来日。西ドイツ館（球体で、壁に50個のスピーカー）にて、連日シュトックハウゼンの音楽を演奏。

1975年 シュトックハウゼン出版設立、2人のパートナー。スザンネ・スティープンス：クラリネット奏者、カティンカ・パスフェーア：フルーティスト。

1977年 超大作オペラ《光》に着手（～2003）。

1998年～ シュトックハウゼン講習会開催。

2004年 連作《クラング》に着手。24曲中21曲までを作曲。

2007年 12月5日 死去。

5. シュトックハウゼンの作品

・20～21世紀の音楽

シュトックハウゼン作品の説明に先立ち20～21世紀の音楽について概観した。

調性音楽→無調音楽

半音階的和声法が飽和状態に達する→無調→

12音技法（シェーンベルク他）→

トータルセリエリズム（シュトックハウゼン、ブーレーズ他）

多様性の時代

イズムの乱立

「音楽」という概念の揺らぎ

美術や演劇、思想との境界が曖昧に.

（シアターピース、ハプニング、偶然性、ケージ）

・シュトックハウゼンの作品の特徴

初期と後期では、同じ作曲家の作品と思えないほど作風が異なる。

ほぼ生涯全般にわたって、共通の作曲技法（セリエ技法）を使用。

「テンポの半音階」

器楽奏者のパフォーマンス

・シュトックハウゼンの作品の変遷とキーワード

点作法、群作法

電子音楽、ライブ・エレクトロニクス

偶然性、不確定性

モメント形式

直感音楽

フォルメル技法

空間性

楽音→ノイズ、自然音

ハプニング、パフォーマンス

オペラツィクルス《光》

クラング

・演奏した作品

ピアノ曲Ⅱ（1952-3）

ピアノ曲Ⅻ《ルシファーの夢》（オペラ《光》の「土曜日」のワンシーンのピアノソロバージョン・抜粋）

会場を取り巻くように8個ないし4個のスピーカーを配置し、サウンドプロジェクションを用いて、内部奏法の音や、口笛、歌、言葉などを増幅。ピアニストには様々なパフォーマンスが指示されている。まず舞台袖から登場し、手袋をはめて手の平でグリッサンドを行い、インド鈴をかき鳴らし、数字をドイツ語で叫び、小型ロケットを飛ばし、終盤にはピアノに座りお尻でグリッサンドを行い、舞台から去って行く。演技力の要求される曲で、現代曲としては上演効果が大き



2002年5月25日
近藤伸子ピアノリサイタル—20世紀のピアノ曲Ⅲ 演奏風景

く、コンサートや現代音楽のコンクール等で取り上げられることも多い。

・視聴した作品

時間の関係で、殆どが冒頭部分のみであったが、下記の作品を視聴し、解説した。

<音源>

ドリスのための合唱曲（1950）

グルッペン：3群のオーケストラのための（1955-7）

少年の歌（1955-6）電子音楽

コンタクテ（1958-60）電子音、ピアノ、打楽器のバージョン

ピアノ曲Ⅹ（1954/61）トータルセリエリズムに基づいて作曲された、超難曲。ピアノ曲の最高傑作。

シュティミング：6人の歌手のために（1968）倍音列に基づく作品。

《光》の「木曜日」より“ミヒャエルの青年時代”（1978-9）

<動画>

ヒュムネン（1964）オーケストラ付きバージョン。世界の国歌を素材とする作品。シュトックハウゼン自身の指揮による映像。

ハーレキン：クラリネットのために（1975）パフォーマンスを伴う作品。

その他、不確定性によるピアノ曲Ⅻ（1956）およびテキストのみが記載された直感音楽《七つの日より》（1968）など通常の楽譜とは大きくかけ離れた特色ある楽譜を画像で紹介した。

また、オペラツィクルス《光》および晩年の連作《クラング》について、その概要を説明した。《光》については、ひとつの「スーパーフォルメル」というセリーから全てが導き出され、音楽のみならず、動作や照明、テーマカラーに至るまでセリーによって規定されている事などを画像を見ながら解説した。

6. シュトックハウゼンの評価

- ・職人気質か誇大妄想狂か
- ・9.11テロ発言の誤解

シュトックハウゼンは、誇大妄想狂の人物と誤解されがちで、日本においても、ケージが常に好感度の高さを保っていたのに対して、一時はかなり不遇な評価を受けていた。しかも、それは作品自体に対して、というより、本人の言動や性格に起因するものが多かったようである。私自身、シュトックハウゼンのピアノ曲を演奏した際に掲載された批評が、音楽や演奏に対するものでなく、シュトックハウゼン個人を攻撃する内容で唖然としたことがある。作品を作者と関連づけて評価すべきか、切り離して作品自体を評価すべきか、というのは、いつの時代にも難しい問題である。

7. 現代曲の演奏上の問題点

現代曲を演奏する場合、曲によっては通常のピアノ曲を演奏する場合には考えられないような困難に直面することがある。ここではシュトックハウゼンのピアノ曲ⅩとⅩⅢを例に挙げて、必要な作業や、遭遇する困難について解説した。

ピアノ曲Ⅹ

- ・特殊な記譜法と両端の音が指定された前腕クラスターの頻出により、譜読みも演奏も著しく困難（20分ほどの曲だが、練習に約2年を要する。私見ではこの一曲を譜読みする労力でベートーヴェンの32曲のソナタ全曲を譜読みできる）
- ・練習が不快（時には嘔吐感をおぼえることすらある）
- ・覚えにくく、忘れやすい（身体や脳に定着しにくい）

ピアノ曲ⅩⅢ《ルシファーの夢》

- 実務・経済面：
- ・内部奏法用のピアノおよびPA 機器のレンタル
 - ・音響専門家の依頼
 - ・著作権料の発生
 - ・ロケット作成依頼
 - ・内部奏法用譜面台の作成
 - ・インド鈴、スタンド、鹿角のバチ、手袋の調達
- 演奏面：
- ・内部奏法の弦にシールを貼る
 - ・内部奏法の際、杵の位置が機種により異なる場合

がある。

- ・ソステヌートペダルの多用
- ・ピアノ以外《声、口笛、パフォーマンス》の練習が大変。
- ・プラス面：
- ・ピアノ演奏以外の多様な役割を楽しめる

テクニカルな面ではそれほど高度ではない。譜読みもピアノ曲Ⅹと比べてはるかに楽。演技力と忍耐力とセンスがあれば演奏可能。

◆感想

今回の経験を通して、私自身あらためて色あせないシュトックハウゼンの魅力を再認識することができた。2028年には生誕100年を迎えるが、また機会を見つけて演奏していきたい。

幸い学生の反響はかなり大きく、シュトックハウゼンの生涯や作品から、好き嫌いは別として様々な刺激を受けたようで、クラス授業で活発なディスカッションが行われた。レポートのテーマに選んだ学生も多く、音楽という概念を再考したい、現代音楽をこれから沢山聴いたり演奏したりしてみたい、などの感想が聞かれたのは嬉しかった。「固定観念を打ち破る」というサブテーマはそれなりに達成できたと言えるかもしれない。これを機に学生達がシュトックハウゼンだけに留まらず、さらに興味の幅を広げ、機会があれば是非現代曲の演奏にも取り組むと同時に、柔軟でクリエイティブな思考で自らの人生を果敢に切り拓いてくれることを期待したい。

謝辞

今回の「お話」では、音響をご担当下さった片桐健順先生、コンピューター音楽専修の斉藤花火さん、石坂悠太さん、上原彩愛さん、森谷一馬さん、基礎ゼミ全体を企画された梅本実先生、演奏部諸井重孝課長、教務課小野沢夏実氏、講堂事務室岩崎文博氏をはじめ、多くの方々にご協力頂きました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

参考文献

- Cott, Jonathan. *Stockhausen: Conversations with the Composer* Simon and Schuster 1973
- Kurz, Michael. *Stockhausen: A Biography* Translated by Toop, Richard, Faber and Faber 1994
- Stockhausen, Karlheinz. *Texte zur Musik* Band1-6, Du Mont Buchverlag 1963-1989

松平 敬 『シュトックハウゼンのすべて』 アルテスパブリッシング 2019

シュトックハウゼン, カールハインツ 『シュトックハウゼン音楽論集』 清水禎訳 現代思潮社 1999